

## 藤原頼通の生涯（1）

―「たづ君」の時代―

和田律子

はじめに

藤原頼通は、一条天皇以降後三条天皇まで六代の天皇の時代のほとんどを、平安時代後期の豊穰な文化世界のなかで、関白として社会にかかわった政治家である。彼は、正暦三年（九九二）、太政大臣藤原道長の長子として生れ、承保元年（一〇七四）に八十三歳で薨去するが、寛仁元年（一〇一七）に二十六歳で摂政の地位について以降、約五十年間にわたり、摂政・関白・太政大臣の要職にありつづけた。とくに、長久・寛徳・永承年間（一〇四〇～一〇五三）は、政治文化両面において、主導的立場にあった。『紫式部日記』には、十七歳当時の風雅な青年貴公子頼通の姿が描き出され、『四条宮下野集』には、和歌集や物語収集に熱心な壮年期の関白頼通像が活写される。また、『成尋阿闍梨母集』には、宇治の大殿として文化世界を領導する、晩年の頼通の様子がみられる。平安時代後期の文学作品には、文化世界を領導する頼通の姿が散見され、当時の貴族達が文化の牽引者として頼通をみていたことがわかる。また、『更級日記』には、後宮の文化サロン充実に熱心な頼通の姿が、間接的にはあるが描き出され、当時の頼通の意識がうかがえて興味深い。

このように、藤原頼通の時代とその文化世界は、十一世紀後半の日本の文化活動の基盤をなしてきたと思われるが、これまでは、藤原道長と『源氏物語』の蔭に隠れ、表立って論じられる機会はあまり多くはなかった。頼通の力量はほとんど評価されず、平安後期の文化世界も、道長亡き後、『源氏物語』以後の、積極性に欠け、両者の残光を得てかろうじて存在している「頼通的世界」<sup>(1)</sup>として、きわめて閉塞した特異な文化世界として、消極的な受け止められかたをしてきた。また、藤原頼通の事蹟について調べてゆくと、父藤原道長の存在がいかに大きかったかが改めて感じられる。そのために、少し前までは、頼通はさほど脚光を浴びることもなく、それほど魅力ある人物としても扱われてはこなかった。<sup>(2)</sup>最近では、頼通の時代は後期撰関時代と称されて少しずつ注目されるようになり、頼通に関する評価にも再検討<sup>(3)</sup>が加えられるようになってはきたが、未だその評価は父道長に比すべくもない。

しかし、考えてみれば、頼通の生涯は、一条・三条・後一条・後朱雀・後冷泉・後三条と六代の天皇の時代にわたり、中でも後一条天皇時代末から後冷泉天皇時代にかけては、『源氏物語』以後のいわゆる平安後期物語輩出の時期に重なる、文学史上重要な時期に当たっていた。この時期のほとんどを関白として生きたのが藤原頼通である。その頼通が、当時の社会に、とくに、文芸文化の方面に、何の影響も与えず何の役割も果たさずにその生涯を閉じた人物であったというのだろうか。何の評価も得られないほどに凡庸で注目に値しない人物であったのであろうか。頼通中心の文化世界では、歌合が頻繁に開催され、『堤中納言物語』や『狭衣物語』や、現在は散逸してしまっている物語を含む多くの文学作品が生み出され、齋院齋宮文化圏や男性貴族文人層のあいだで活発な文学活動<sup>(4)</sup>が展開されていた。どの時代にも、どの世界にも、その場特有の文化的基盤があり、ひとびとの意識がその場の作用を受けていることは、当然のことであろう。しかし、頼通中心の文化世界について検討をかさねていくと、たんなる時代特有の基盤というだけでは済まされない、一般的な時代の場とは一線

を画する、文化面での特異性がみえてくるように思われる。それは、頼通の、文芸文化にたいする高い見識と絶対的な指導力によって成立した、特異で高度な文化世界であった。頼通中心の文化世界は、頼通が中心であり、頼通が牽引し、天皇をはじめ男性貴族層も後宮女房も巻き込んで作り上げられた、頼通の意志が強く反映された文化世界であったように思われる。

頼通中心の文化世界は、作者も読者も、大きく括れば『源氏物語』読者第一世代にあたり、『源氏物語』に深い理解を示し、かつ、『源氏物語』の世界を独自の解釈で取りこむことに熱心なひとびとに支えられた文化世界であった。そして、この文化世界では、知の流行に敏感で、その流行を共有することがまた〈流行〉の最先端として認識されていたようである。その一端は、藤原頼通の孫皇女祐子内親王に仕えた菅原孝標女の作である『更級日記』をみてもあきらかである<sup>(5)</sup>が、それも、文化にたいする確かな目を持ち、指導力を発揮する頼通という背景、すなわち〈場〉があつたからこそ現われたのではなかつたろうか。頼通の時代は、父道長の時代の延長というのとは別の認識が必要なように思われる。頼通の時代は、道長の時代の亜流や残光ではなく、頼通の見識による独自の文化世界が展開された時代として、認識を新たにする必要があるのであるのではないだろうか。このような視座にたち、頼通の生涯に検討を加え、その時代の文芸動向とからめつつ、主として文化人としての方面から、頼通について論じたいと考えるが、本稿では、頼通が育つた家庭を中心に、少年時代と青年時代の頼通を追うことにする。

## 第一節 「たづ君」の誕生

藤原頼通は、正暦三年（九九二年）一月、のちに、御堂関白と呼ばれた藤原道長の嫡男として誕生した。父

道長は、正三位中宮大夫であった。母は、宇多源氏でのちの左大臣源雅信女倫子。頼通は、「たづ君」と命名された。同年冬には、異母弟頼宗（十二月生れ。母明子）も誕生した。撰関家の長子として、頼通は、物心両面で、両親からも周囲からも特別視されて育った。頼通は、生れたときから「二代目」としての宿命を背負っていたといえよう。父道長の強い期待と、母倫子の深い愛情に包まれて、特別な庇護のもと、頼通は素直な青年に育っていったが、父道長の死を契機とし、しだいに独立してゆく。将来、撰関家を背負って立つにいたる道筋も、この少年期に準備されていたようである。

頼通誕生前後の状況について、『栄花物語』で辿っておきたい。

倫子に懐妊の兆候がみえたとき、父源雅信は「いかにいかにとおぼし、祈らせ」（みはてぬ夢）たという。いまだ、男の子には恵まれていなかった道長夫妻も、倫子の懐妊に男子誕生の期待をよせたであろう。同じ頃、道長のもうひとりの妻明子も、懐妊した。翌年、正暦三年、「土御門の上も、宮の御方も、みな男君をぞ生み奉らせ給ひける。殿の若君をば、たづ君と、宮の御方のをば、（中略）いは君とつけ奉り給へり」（みはてぬ夢）という。「たづ君」すなわち頼通と、「いは君」すなわち頼宗とは、異母兄弟として、以後、頼通の時代をともに生きることになる。

長保三年（一〇〇一年）、十歳のたづ君いは君は、東三条院詮子四十賀で舞いを舞った（『権記』十月七日条、『小右記』十月九日条、『大鏡』昔物語）。

殿の君達二所は、童にて舞ひ給ふ。高松殿の御腹のいは君は、納蘇利舞ひ給ふ。殿の上の御腹のたづ君、陵王舞ひ給ふ。（中略）この君達の御うつくしさを、だれもだれも涙とどめず見奉る人々多かり。

（『栄花物語』とりべの）

このように、たづ君いは君は、道長家の長男次男として、ふたり揃って公式にデビューした。しかし、その後は、頼通の姿が次第に目立ちはじめ、後年には、頼通の退出にあたり、頼宗は弟の能信とともに松明を持ち頼通を見送ったこともあった（『古今著聞集』巻第八 万寿二年（一〇二五）、頼通三十二歳）。

長保五年（一〇〇二年）、十二歳の頼通は、元服する（『日本紀略』『本朝世紀』『権記』二月二十日条）。翌年春の春日祭で、頼通は名誉ある春日の使いを務めた（『御堂関白記』二月五日条）。このときの様子は、『栄花物語』（はつはな）に詳しい（『栄花物語』の記述は時間経過等において、史実と食い違いがあるが、頼通をめぐるひとびとの心情をうかがうことはできる）。

道長は、子どもを春日の使いに出すのは初めてのことなので、「よろづにかひがひしき御有様で」支度に奔走する。頼通は、「何となくふくらかにてうつくしうおは」した。道長は感動して見守り、出発前は直接世話を焼き、出発後も、道中の様子を牛車から見守ったという。翌日は雪が降った。道長は頼通の道中を案じ、四条中納言公任と和歌を詠み交わした。これを聞いた花山院も、「我すらに思ひこそやれ春日野の雪間をいかで鶴の分くらん」と、鶴に「たづ君」をかけて、父親である道長の心情を察する歌を贈った（以上、『栄花物語』「はつはな」、『御堂関白記』寛弘元年二月六日条）。

『栄花物語』は、この記述の少しあとの、寛弘二年の条にも、頼通の春日の使いの様子を描く。これは、実際は別人で、頼通とするのは『栄花物語』の誤りであるが、そこには、頼通の「何となう小さくふくらかにうつくしうて渡り給ふ」さまを目の前にした道長が感動のあまり、「御涙ただこぼれさせ給」い、「子のかなしさ知り給へる」人々も、みな道長に共感したと記される。先述のとおり、この部分には『栄花物語』の事実誤認があるが、事実としては別人の話であったとはいえ、このように描かれていることから、道長の、親として

頼通にかかる期待と愛情がなみなみならぬものであったことが伝わってこよう。

頼通は、十八歳で、具平親王女隆姫女王と結婚した。隆姫は、「御年十五、六ばかりの程にて、(中略)めでたき御かたちと推し量り聞こえさせ」、父具平親王に深く愛されていた姫君であった。道長もこの婚姻に熱心であった。頼通も隆姫を大切に思い、ふたりは仲むつまじく、幸せな家庭生活をおくったが、隆姫には子どもが生れなかった。道長は、三条天皇皇女禊子内親王の降嫁を受けるよう、頼通を説得するが、頼通は隆姫を思い、目に涙を浮かべて固辞した。道長は、「男は妻一人のみやは持たる、痴れの様や。いままでも子もなかめれば、とてもかうてもただ子を設けんとこそ思はめ。」とさらに強く勧めた。(『栄花物語』(玉の村菊)、『小右記』長和四年十月十四日条)。しかし、頼通は、まもなく重い病の床に臥せる。隆姫の父具平親王のたたりかとささやかれた。

頼通重病の事実をまえに、道長夫妻の狼狽ぶりははなはだしく、道長は、尊い僧たちを動員して加持祈祷にあたらせた。倫子は、頼通に付き添い、「この殿(頼通―稿者注)は小うよりいみじう風重くおはします」と、頼通の幼少時のことを思い出して、看病した。倫子は手づから頼通に湯を飲ませ、頼通の顔に自分の顔を押し当てて涙を流し、危篤に陥ると、「ただ児のやうに抱き奉らせ給」うたという(『栄花物語』玉の村菊)。両親の献身的な看病の結果、頼通は、ようやく回復した。その結果、降嫁の話は沙汰やみとなったという。道長夫妻の頼通によせる愛情の深さが、ここにもうかがわれるであろう。

この事件と前後して、頼通は、初めて子を設けた。相手は、彰子に仕える女房故山井三位藤原永頼女四の君である。しかし、待望の子どもであったにもかかわらず、永頼女は出産直後に亡くなり、子どもも三日後に亡くなった。『栄花物語』には、「大将殿の御有様、かやうにて、御子のおはしますまじきにやとぞ、人々聞こえさすめる」(玉の村菊)とあり、頼通は将来にわたって子どもに恵まれないのでは、という誰言うでもない好

奇心にみちた風評が世間にあつたことを窺わせる。さらに、『栄花物語』には、「関白殿、年頃御子といふもの持たせ給はぬ嘆きを、入道殿・上まで思しめしたるに」（若ばえ）とあるように、頼通だけでなく、道長夫妻も、子どものことを気にかけていたことが窺われる。頼通に子どもがいなかったことは、『大鏡』（道長上）にも書きとめられている。

万寿二年（一〇二五年）一月十日、三十四歳の頼通に、待望の男の子が誕生した。嫡男通房である。母は、故右兵衛督憲定女。道長も頼通も男児誕生を非常によろこび、「禪門並びに殿下喜悦させ給ふこと限りなし」（『左経記』）と、源経頼はその日の日記に記している。ここにも、頼通とともに、わがことのように喜ぶ道長の姿がみられるのである。正妻隆姫に忍んでの寵愛であつたため、頼通は、直接出かけていくことはできなかったようだが（『栄花物語』若ばえ）、使いを頻繁に出しては、誕生を喜び、道長はみずから七夜の儀式をとりおこなつたという（『大鏡』道長上）。

通房は、生後まもなく道長夫妻に引き取られ、大切に育てられた。とくに、道長室倫子の溺愛ぶりにはなほだしく、その様子は、「ただ大臣（頼通―稿者注）の幼かりし折りに違はずとぞ、うつくしみ給ふ」（『栄花物語』若ばえ）という状況であつた。この場面は、その昔、倫子が頼通をいかに可愛がったかをうかがわせる資料としても興味深い。また、頼通の姉で道長邸に住んでいた一条天皇中宮彰子も、若君の誕生をよろこび、「常に迎へ奉らせたまひて抱きうつくしませたまふ」（『栄花物語』若ばえ）たという。すでに、二人の子どもをもつていた内大臣教通は、通房をめぐるこうした道長夫妻たちの言動を、「母なき子どもをあまたもて扱ふ。親は一人召すべかりける」など興なげに」批判したという（『栄花物語』若ばえ）。

通房をめぐり、さまざまな場面でさまざまな思惑が行き交つたと思われる。

しかし、頼通にとっては、貴重な嫡男の誕生であつた。隆姫との結婚直後から、後宮政策も見越して、教通

の子や隆姫の弟源師房を養子<sup>(6)</sup>に迎え、実子のいないことを養子で補おうとしてきた頼通にとり、通房誕生は、大きな喜びであり安堵でもあった。

が、通房は、二十歳で世を去るのである。

しかし、『栄花物語』に、「殿の御子おはしまさずと申したるに、かくさまざまとめでたく、世のかためとならせ給ふべき一人だち出でおはしましけるものを」(根合)とあるように、頼通は、後年何人もの子どもに恵まれる。『尊卑分脈』によれば、通房亡き後、師実・俊綱・家綱(正しくは定綱)・忠綱・覚円・寛子と、頼通は、六人もの子に恵まれたのである。ただ、早世した通房は別として、師実以外の男子は、養子に出された。隆姫のねたみによるものと『愚管抄』は記す(巻第四)。通房薨去後、師実の存在を知った隆姫が、「サル者アリトコソ聞ケ。ソレトリヨセヨ」と許したために、頼通は、ようやく師実を公に嫡男として紹介できたという。『愚管抄』は、師実を運のよい人と評す(以上、『愚管抄』巻第四)。六人の男子の末弟に生れながら、時の流れて嫡男と認められた師実は、たしかに運のよい人であった。しかし、頼通の立場で考えれば、六人の男子が、もっと早い時期に、正式に認められ、政界に登場させられたら、通房が早世せず、昇進しつづけていたら、頼通の人生はもっと違ったものになっていただろうか。そういう意味では、頼通は、子どもについては、不運なひとであったかもしれない。

道長が、頼通をいかに愛したか、いかに期待したか、いくつもの場面のいくつもの話をつなぎ合わせるにより、道長の頼通に対する思いの深さと特別さが、伝わってこよう。源為憲が、道長の要請で、頼通の教科書として作り上げた『世俗諺文』(寛弘四年(一一〇七)成立)の存在も、そうした道長の思いを端的に表わしているのではないだろうか。



## 第二節 頼通と教通

頼通と教通は、藤原道長と鷹司殿倫子との間に生まれた同母兄弟である。道長には、高松殿明子との間に生まれた頼宗や能信等の息子たちもいて、皆ほぼ同年代である。しかし、その昇進の速度には明らかな差があり、明子所生の子どもたちの出世は倫子所生の子どもたちと比較してかなり遅れていた。寛弘七年（一〇一〇年）に道長の子どもたちにそれぞれ加階の仰せがあった（十一月二十八日）が、教通（十六歳）従三位、頼宗（十九歳）正四位下、能信（十六歳）正五位下であった。頼通（二十歳）にも仰せはあったが、父道長と同階（正二位）になってしまおうという理由で辞退した（『御堂関白記』）。また、『公卿補任』長和三年（一〇一四）をみると、父道長（四十九歳）は正二位左大臣、頼通（二十三歳）は正二位権大納言、教通（十九歳）は従二位権中納言、頼宗（二十二歳）は従二位権中納言、能信（十九歳）は従三位非参議である。教通と能信は同年齢でありながら、一方は正二位権大納言で一方は従三位非参議と地位にかなりの開きが見え、これ以降もこの格差は縮まることはない。年上の頼宗も教通の上位になることはない。倫子所生の二人がいかに優遇されていたかが知れるであろう。そして、教通は兄頼通のあとを追うかたちで順調に昇進するが、兄を越える事は終世できなかった。

ところで、『御堂関白記』をみていくと、「献馬」の文字が目につく。当時の道長のもとには全国から夥しい数の馬が贈られていたらしい。そして、それは道長だけでなく息子たちにも贈られていた。いくつかの例を挙げてみたい。

寛弘五年（一〇〇八年、頼通十七歳教通十三歳）正月に、二度の「献馬」があった。四日には、前將軍兼光が、道長に五匹頼通教通に各一匹。十七日には駿河守高扶が、道長に二匹頼通教通に各一匹。寛弘七年（一〇

一〇年)には陸奥守濟家が二十匹献馬したが、内訳は、道長に十四匹若宮(のちの後朱雀天皇)頼通教通に各二匹であった(十一月二十八日条)。長和元年(一〇一二年)には、上野守維叙から道長に十匹頼通に二匹の献馬があった(閏十月十七日条)。長和二年には、信濃守公則からの献馬で、内訳は東宮(のちの後一条天皇)若宮(のちの後朱雀天皇)頼通教通に各二匹、頼宗能信に各一匹であった。以上の記録からは、「献馬」の数の割合がほぼ決まっていたらしい事がうかがえる。父道長の約二割を頼通教通兄弟が、約一割を頼宗能信兄弟が受け取っている。これが当時の「相場」であつたらしい。また、兄弟のなかで、頼通にだけ献ぜられることもあつた。このような「相場」は、道長亡きあとも暗黙の了解であつたらしく、道長の遺産分配の際にも適用されている。道長薨去の翌年(長和元年(一〇二八年)、頼通三十三歳教通二十九歳頼宗三十二歳能信二十九歳)に道長所有の馬二十余匹の分配を行なつた。その内訳は、頼通五匹教通四匹頼宗能信各二匹長家(明子所生だが倫子が養子とした)三匹などであつた(『左経記』一月二十五日条)。「献馬」の事例ひとつをみても、頼通教通兄弟と頼宗能信兄弟との差は明らかであろう。また、頼通と教通とはほぼ同格の扱いをされていたと思われるが、先述のように頼通だけに献馬されたときもあり、頼通が道長の長子として別格の扱いを受けていた様子もうかがわれる。

頼通教通兄弟は、十代から二十代にかけて、父道長の庇護のもとに、ほとんど同一行動を取っていたようである。道長が病氣のときには兄弟が父を助け(『小右記』長和元年六月一日条、長和四年七月二十二日条)、道長が物忌を破つて賀茂祭見物に出かけたときにも二人が同行した(『小右記』長和三年四月十八日条)。頼通教通兄弟は頼宗能信兄弟とは明らかに異なる扱いを父道長から受けていたのである。そして、二人は何のわだかまりもなく協力しあつていたと思われる。教通が五節の舞姫の童女を奉つたとき、頼通はのちに豪華過ぎると非難されるほどにみごとな装束を、教通のもとに贈つたという(『小右記』長和二年十一月一五日条)。教通の

娘の生子と真子は同時に着袴の儀を行なったが、道長が生子の、頼通が真子の腰を結った（『小右記』『御堂関白記』寛仁二年（一〇一八）十一月九日条）。生子はのちに後朱雀天皇に入内するが、生子誕生のとき（長和三年（一〇一四）八月十七日）、娘に恵まれていなかった頼通はたいそう羨ましがったという（『栄花物語』）。その生子の着袴に際し、頼通は後見を勤めたということである。また、頼通は後年養子の着袴の儀を執り行った事が記録にみえる（『左経記』治安二年（一〇二二）十二月二十一日条）が、この養子は教通の息子の信家かと考えられる。信家は長元三年（一〇三〇年）に元服するが、頼通の養子のため従五位下に叙せられたと『日本紀略』は記す。

教通は、温和で人に好かれる性格であったらしく、「御心いとなだらかによくおはしまして」（『栄花物語』布引の滝）、「御堂モヨキ子ト思シテ、宇治殿ニモヲトラズモテナサレケル」（『愚管抄』卷第四）とある。青年期の頼通と教通は、道長嫡流の兄弟として、協力しあいながら父と行動をともしていったと思われる。

しかし、後年、頼通と教通のあいだには、多少の波風も立ちはじめた。それについては、時間の経過を追って、のちに、稿を改めて述べていくことにしたい。

### 第三節 頼通の政界デビュー

頼通の政界へのデビューは、長保五年（一〇〇三年）二月二十日の枇杷殿における元服と考えてよいであろう。頼通は、十二歳であった。

加冠は、内大臣公季、理髪は、大蔵卿正光朝臣。正五位下に叙せられ、禁色を許され、御衣を賜う。また、東宮昇殿を許された（『公卿補任』・『日本紀略』・『権記』・『栄花物語』）。なお、『尊卑分脈』は、二月二十五日

とする)。二十八日、侍従に任せられ(『公卿補任』)、八月十六日に右近少将になる(『権記』)。

元服の時期や位階については、頼通も他の兄弟たちとほぼ同じで、ちなみに、教通は、正五下(十一歳)、能信は、従五上(十二歳)、能信は、従五上(十二歳)、長家は、従五上(十三歳)である。

以後、寛弘元年(一〇〇四年)に、叙従四位下(東宮去年御給)・任近江介(以上、『公卿補任』・『御堂関白記』)、寛弘二年(一〇〇五年)に、従四位上(中宮当年御給)『公卿補任』・『御堂関白記』、『権記』)、寛弘三年(一〇〇六年)三月に、従三位(東三條第花宴行幸賞)『公卿補任』・『御堂関白記』・『権記』)、同年九月、叙正三位(上東門院競馬行幸賞)『公卿補任』と、順調過ぎるほど順調なペースで昇進している。というよりも、むしろ、異例の昇進ぶりというべきであろう(平安時代の参議二八三人を調査したところ、参議になった平均年齢四七・五歳、参議になるまでの平均勤続年数二十一年、経験したポスト数十二、とのことである)昭和五十四年七月十二日放映「歴史への招待」NHKTV)。正三位叙位当時、頼通は、十五歳であった。なお、寛弘三年三月の叙従三位の段階で、中将源経房・藤原実成・藤原頼親・源頼定等を超えている(『公卿補任』)。そして、寛弘四年一月二十六日、十六歳の頼通は、東宮権大夫(『公卿補任』)となり、二十九日には、東宮居貞親王のもとに挨拶に参上した(『御堂関白記』)。東宮職は名誉ある職で、人々の切望する職であったという。頼通は、以後、二十五歳まで、居貞・敦成両東宮の権大夫を務めた。道長も、この任官を注意深く見守っていたことが、『御堂関白記』の「春宮権大夫初見宮文書於殿」(寛弘四年二月二日条)等の記事からも窺える。このころから、『御堂関白記』には、「春宮権大夫」の文字が頻繁にあらわれ、「頼通同道」の文字も目立ち始める。

その一端を紹介しておく、寛弘四年 春日詣(二月二十八日)・金峰山詣(閏五月十七日)、寛弘五年 賀茂詣(四月十八日)、寛弘六年 比叡山舎利会(五月十七日)等である。また、一門の子女の産養や着袴等へ

の勤仕も頻繁になる。寛弘六年（一〇〇九年）の園韓神祭には、神祇官に参り祭りを行ない（『御堂関白記』・『日本紀略』十一月十四日条）、寛弘七年（一〇一〇年）豊明節会には五節舞姫を献上し、すべてをみごとに行ない、面目をほどこしたという（『御堂関白記』十一月十三日条）。

このように、頼通の公的活動が始まったのがこの時期であった。長保から寛弘にかけての約十年間は、頼通にとつて、政治活動の足慣らしの時期にあたっていたといえよう。

寛弘七年（一〇一〇年）、頼通に加階の仰せが下った。当時、従二位であったが、加階の結果、父道長と同階になってしまうため、頼通は、加階を辞退した（『御堂関白記』十一月二十八日条）。翌年の頼通の春日詣では、雲上侍臣地下人すべて追従したため、大和国司はその数に困惑し、その日の天皇に奉仕したのは、わずかに、蔵人頭など数人であった。頼通が社会人としてしだいに独立し権勢を誇るようになっていったさまがうかがえよう。しかし、そのいっぽうで、春日詣出発に先立ち、頼通はまず両親のもとに、光栄ある姿を見せに行っている（以上、『小右記』二月十五日条）。道長は、以前、三条天皇に、頼通の昇進を強引に願いでて、結局、道長の思いどおりの人事が行なわれたこともあった。また、『小右記』で、小野宮実資が再三批判しているように、除目のさいの「親子列立」（『小右記』長和二年（一〇一三年）一月二日・一月二十四日・長和三年十月十四日条）の行動もあつた。政治家として成長しはじめた頼通の背後には、父道長の姿が見え隠れするのである。

寛仁元年（一〇一七年）、道長は、摂政の座を頼通に譲った（『公卿補任』・『日本紀略』・『尊卑分脈』寛仁元年三月十六日条）。頼通二十六歳であった。まだ若いとの周囲の意見に、道長は、「我おはしませば何事もおのづから」（『栄花物語』）と言ったという。道長の強い自信のもとにおこなわれた昇進であった。この十二日前に頼通は内大臣になっている。寛仁三年（一〇一九年）、道長の出家にともない、頼通は、関白内大臣になっ

た（『公卿補任』・『日本紀略』・『小右記』等十二月二十二日条）。二十八歳の頼通は、いよいよ政治の表舞台に登場したかに思われた。

しかし、実際には、除目の決定等重要なことからは、逐一道長の見解を求め、あまり頻繁に質問がくるため、道長は、「如此事余非可定申」（『御堂関白記』寛仁三年八月二十九日条）と、頼通を突き放すことも再三であった。また、『小右記』の記主藤原実資も、頼通のこうした姿勢を鋭く批判している（『小右記』寛仁元年十月五日条）。

万寿四年十二月四日、道長は世を去った。父道長の死に直面し、頼通は、摂関家一族の長として、政界の長として、公私にわたり、自分の責任と義務を自覚させられたのである。

道長の葬儀は、世間騒然のうちに終わった。世間では、今後の摂関家の行方を固唾を飲んでみまもっていたことであろう。『栄花物語』（殿上の花見）は、そのあたりの様子を、『源氏物語』にたとえて、以下のように伝える。

光源氏かくれ給ひて、名残もかくやとぞさすがに覚えける。めでたきながらもあはれに覚えさせ給ふ。後の宮（明石中宮）、右大臣殿（夕霧）、薫大将などばかり、ものし給ふほどの覚えさせ給ふなり。さすがに末になりたる心地してあはれなり。

世の人々の、頼通の時代到来にたいする漠とした不安が伝わってくる場面である。道長のワンマンぶりを批判的にみていた人々も、一時代を完全に掌握していた道長の死の前に、それぞれに複雑な感慨を抱いたことであろう。そして、道長が死の直前まで庇護しつづけてきた嫡男頼通に対して、心のどこかで、『栄花物語』作

者と同様の、一抹の不安や頼りなさを感じていたであろう。

しかし、これは、杞憂であったといっても、差し支えないであろう。

道長の死（万寿四年二月四日）後、頼通は、葬儀の手順について、ただちに実資に問いあわせた（『小右記』万寿四年二月六日七日条）。その後も、解陣や開門について、重服人随身の装束について、主上着服について、等々、毎日のように、故実を中心に実資に尋ねている。頼通が、嫡男の自覚をもって、一族の中心となり、道長の葬送や事務処理に当たっていたことを示している。

頼通は、以後も、何かにつけて実資を頼り、実資もこれに誠実に応えたようである。道長薨去翌年の九月には、実資は頼通に、道長の御記を書写して贈っている（『小右記』長元元年九月六日条）。

葬送についての諸行事が一段落すると、頼通は、道長の遺産分配の仕事に着手した。

長元元年（一〇二八年）一月二十五日には、道長の遺した馬を分配した。内訳は、頼通五疋、教通四疋、頼宗・能信各二疋、長家三疋、僧等各一疋である（『左経記』長元元年一月二十六日条）。頼通教通兄弟が、頼宗能信兄弟よりも優遇されていることに注意しておきたい。

頼通は、四月と十二月にも、遺産の分配をおこなった。その方法は、法成寺に納めるべきものは、まず納め、庄や牧等、寄付すべきものは寄付し、残りを院宮、殿ばらの順に分奉したという（『左経記』長元元年四月八日、同年十二月二十二日条、『栄花物語』鶴の林）。また、長元五年（一〇三二年）には、道長の遺領近江国甲可郡大原庄を、中宮威子に奉った（『左経記類従雑例』）。

このような頼通の行動を、『栄花物語』（鶴の林）は、「殿の御前の御心掟にも、関白殿さしすすみあるべき限りめでたくおはします」と、評価するのである。

## おわりに

道長の死前後にあたる寛仁年間の社会状況は、内外ともに困難な時期にあった。地方の農民の力が強まり、国司はその対応に苦慮していた。中央政府は、国司をかばい、農民の上訴をあえて無視したりした。その政策の中心にあったのが道長であった。坂本賞三氏は、当時の状況を「このさきどうなっていくのかを見通していたのは、ほかならぬワンマン道長だけであった」と断言され、関白左大臣頼通の姿にはまったく触れない。社会状況は、道長の死後、ますます悪化し、頼通の「国政指導の後退」という批判もなされるが、これまでの一連の道長の行動を考えると、一概に頼通ひとりを責めることもできないのではないかと思われる。道長が、政治の場にあつて他の公卿の介入を許さなかったということなどをみても、道長の死の前後における頼通の行動を、「熱意なし」「父道長に比べると、すべての点で劣り、執政への意欲を欠いていた」と評しきれるであろうか。「道長に庇護される頼通」という構図が道長の死まで続いたのは確かだが、それをもって、頼通を「総領の甚六」と批判してしまつてよいのであろうか。頼通の生きた時代は、道長の時代よりも社会情勢ははるかに多面化してきていたのである。

赤木志津子氏が藤原頼通論が発表されたのは、昭和四十九年であった。赤木氏は、「大きい存在であった父道長のかげで目立たなかつた後嗣の頼通に注目して」、古記録をたどり、頼通の一生にせまる。そして、「宇治の関白頼通は、特に実績をあげるといふ人物でもなかつた。」「よくも悪くも総領の甚六的な公卿だったにちがいない。」「しかし、その「物足りなさこそ、この社会の沈澱した空気の中の公卿そのものであつたともいえようか。」と結論された。現在からみると、掘り下げが不足している観があるが、頼通にほとんど脚光があたりなかつた当時してみると、赤木氏の御論は画期的で、頼通研究史上貴重なものといえるであろう。当時の頼



通研究の状況をよく表わしている。それ以前は、頼通に焦点をあてた論考はほとんどなく、道長論<sup>12</sup>のなかで付随的に論じられるにすぎなかった。当時の頼通認識や頼通研究の手薄さがうかがわれよう。

そのような研究状況下にあつて、井上宗雄氏は、歌人としての、また、文化の領導者としての関白頼通に早くから注目されてきた。『平安後期歌人伝の研究』<sup>13</sup>第一章冒頭で、平安後期歌壇における権門貴顕の果たした役割について述べ、「最も重要なのは頼通である」と指摘された。同書には、頼通の文化人としての側面が、具体的に数多く指摘されていて、新しい頼通論の嚆矢といつても過言ではない。近年では、文芸サロンとの関連で、文化の領導者頼通の役割が見なおされつつあり、多くの研究者により頼通論が発表され、頼通への関心が深められている。歴史学の方面でも、頼通再評価を目指す論考<sup>15</sup>が発表されはじめた。とくに、坂本賞三氏の『藤原頼通の時代』<sup>16</sup>（平成三年）は、「頼通」を書名に冠した画期的な書物である。歴史学の研究書で、主として政治家としての頼通論ではあるが、従来の頼通観の再評価という点においても、重要な一書である。

以上、研究史を概観したが、近年の頼通再評価の動きは、今後もいっそう強まるであろうと考える。そして、このような研究状況を考えたとき、頼通の評価についての結論を出すのは、もうしばらく先に送り、頼通の活躍を見極めてからでも遅くないのではないかと思うのである。

さて、二十代後半の頼通は、しだいに独自の行動を起こしはじめていた。その代表的なものが、高陽院造営事業<sup>17</sup>であろう。高陽院造営に対する頼通の意欲はすさまじいものがあり、藤原実資は、こうした頼通の様子を「帝王の如く」であると伝えている（『小右記』寛仁三年六月二十四日条）。

頼通は、周囲から危ぶまれながらも、道長亡きあとを、無難に踏み出していった。真の意味での頼通の出発点は、ここからであろうが、それについては、稿をあらためたい。

注

引用本文は、以下のとおりである。傍線等はすべて稿者による。

『采花物語』 松村博司氏校注 日本古典全書（朝日新聞社）

『大鏡』 橘健二氏加藤静子氏校注・訳 新日本古典文学全集（小学館）

『愚管抄』 岡見正雄氏赤松俊秀氏校注 日本古典文学大系（岩波書店）

『古今著聞集』 永積安明氏島田勇雄氏校注 日本古典文学大系（岩波書店）

『小右記』 『御堂関白記』 大日本古記録

『水左記』 『権記』 新訂増補国史大成

『尊卑分脈』 『公卿補任』 新訂増補国史大系

（1）「頼通的世界」とは、平安時代後期の、ある特殊な状況を示す括弧つきの語として一般に用いられている。この語がこのように一定の状況をあらわす語として広く用いられるようになったのは、犬養廉氏の「和歌六人党に関する試論―平安朝文壇史の一齣として―」（『国語と国文学』昭和三十一年九月、のちに、『平安和歌と日記』平成十六年 笠間書院に所収）あたりからであろう。犬養氏は、同論文で「頼通的世界」を次のように規定して使用された。

「拾遺から後拾遺に至る八十年は、後三条朝の成立を境として、政治上、前後二期に分けられる。前期は摂関制の爛熟期であり、後期は院政が緒につく時期である。換言すれば、前期は頼通的世界の完成期であり、後期はその清算過程に当たる。」（以下省略・傍線稿者）

犬養氏は、右のように「頼通的世界」を前期後期の二期に分けて考えられた。そして、前期の頼通的世界の完成期を、「後冷泉宮廷の頼通を中心とする一大血族集団における大家族的な親睦世界」すなわち「頼通化された宮廷社会」と説明される。

これ以後、「頼通的世界」は、犬養氏が示された固有の概念を持つ、括弧つきの語として用いられてきた。その例を次に二、三あげておきたい。（引用文中の傍線は稿者による。）

\*「反頼通的世界」形成者—後拾遺集を撰述し、新古今の芸術家にまで自己を昂めていった公卿受領の貴族歌人の先駆たち

近藤潤一氏「平安朝歌壇における近代派の形成」（『国語国文研究』昭和三十二年四月）

\*上東門院をバックとするいわゆる頼通的世界は、撰閑政治の頂点を既にすぎたと自覚した、協調的懐古的世界といえよう。

岸上慎二氏「宮廷生活と後宮と女房—後冷泉院期を一例として—」（『国文学』昭和四十二年一月）

\*天喜三年五月三日の物語合は、後宮女流サロンの融和的で協調的な、いわゆる頼通的世界から生まれてきたものである。

神野藤昭夫氏「六条斎院家物語合考—物語史の動向を考へる—」（『国文学研究』第五十四 昭和四十九年十月）のちに、

日本文学研究資料叢書『平安朝物語Ⅲ』（有精堂 昭和五十四年）に再録。その後、神野藤昭夫著『散逸した物語世界と物語史』（平成十年 若草書房）に所収。

なお、「頼通的世界」の詳細については、以下の論考を参照されたい。

犬養 廉氏「撰閑時代後期の文学潮流 後冷泉朝文壇への照射」（『解釈と鑑賞』昭和三十八年一月、のちに、『平安和歌と日記』平成十六年 笠間書院に所収）

稲賀敬二氏「後冷泉朝の歌壇」（講座日本文学4中古編Ⅱ）全国国語国文学会監修 三省堂 昭和四十三年

(2) 北山茂夫氏 『藤原道長』岩波新書 一七九頁

北山茂夫氏 『王朝政治史論』（日本歴史叢書）昭和四十九年 岩波書店

赤木志津子氏「宇治の関白頼通」（『古代文化』二十六卷十二号 昭和四十九年十二月）

代表的な御論考を右に掲げた。これについては、本稿最後に詳しく触れる。

(3) 坂本賞三氏『藤原頼通の時代』（平成三年 平凡選書138）

(4) 神野藤昭夫氏「六条斎院家物語合考—物語史の動向を考へる—」（『国文学研究』54 昭和四十九年十月、のちに日本文

学研究資料叢書『平安朝物語』昭和五十四年十月 有精堂に収録）、『斎院文化圏と物語—平安女流文学のもうひとつの基盤—』（『日本文学研究』4 北京日本文学研究中心 一九九五年九月）。この二論文は、のちに、『散逸した物語世界と物語

史』平成八年 若草書房に収載。

久保木秀夫氏「和歌六人党と西宮歌会」（『中古文学』第六十六号 平成十二年十二月）

- (5) 拙稿「『更級日記』「萩の葉」段の笛吹く人をめぐって」『日記文学研究誌』第六号 平成十六年三月、「『更級日記』論にむけて―「萩の葉」の段から考える―」『更級日記』の新研究―孝標女の世界を考える』平成十六年九月 新典社
- (6) とくに、頼通は、隆姫の弟源師房は幼い頃から頼通邸で育ち、頼通もかわいがっていたらしい。
- 『栄花物語』には、「万寿宮（源師房―稿者注）の御直衣姿もをかしうて出で入りまざれたまふを、殿（頼通―稿者注）ただ我が御子のやうにうつくしみ奉らせたまふ」（玉の村菊）とある。このとき、万寿宮は、六歳であった。
- 頼通の養子関係については、高橋秀樹氏「藤原頼通をめぐる養子関係」（『日本歴史』531号 平成四年八月、のちに、『日本中世の家と親族』に収載 平成八年 吉川弘文館）、倉田実氏「王朝撰関期の養女たち」（平成十六年 翰林書房）を参照されたい。

(7) 井上宗雄氏 『平安後期歌人伝の研究 増補版』四十三頁参照 昭和六十三年 笠間書院

(8) 坂本賞三氏 『日本の歴史』6撰関時代（昭和四十九年 小学館）三一九頁

(9) 北山茂夫氏 『藤原道長』岩波新書 一七九頁

(10) 北山茂夫氏 『王朝政治史論』（日本歴史叢書）昭和四十九年 岩波書店

(11) 赤木志津子氏「宇治の関白頼通」『古代文化』二十六卷十二号 昭和四十九年十二月

(12) 清水好子氏 『藤原道長』（『中古文学』第一号 昭和四十二年）は、「勃興期の左大臣道長の生き方」を、初期の『御堂関白記』から探ったもので、頼通論の関連論文として、注目される。

北山茂夫氏の注（9）・（10）の道長論も重要である。

斎藤熙子氏は、早い時期から頼通の息子である橘俊綱について考察を重ねてこられたが、これらの御論考も頼通研究には欠かせない。

「橘俊綱考―その一 伝記をめぐって―」『平安文学研究』第二十五輯 昭和三十五年十一月、「橘俊綱考（その二）―俊綱の周辺―」『共立女子大学短期大学部紀要』第四号 昭和三十五年十二月、のちに、『赤染衛門とその周辺』平成十一年 笠間書院に所収）

(13) 井上宗雄氏 『平安後期歌人伝の研究』五十三頁 昭和五十三年 笠間書院

- (14) 神野藤昭夫氏 『散逸した物語世界と物語史』 平成八年 若草書房
- 久下裕利氏 『狭衣物語の新研究―頼通の時代を考える』 平成十五年 新典社
- (15) 末松剛氏 「平安時代における撰関家の先例観について―御堂流故実の再検討―」『九州史学』第二二四号 平成九年九月。  
「撰関家における服飾故実の成立と展開」(上・下)『福岡大学人文論叢』第三十二卷一号・二号 平成十二年六月・九月等
- (16) 坂本賞三氏 『藤原頼通の時代』(平成三年 平凡選書138)
- 古代学協会編 『後期撰関時代史の研究』(平成二年 吉川弘文館) にも、頼通関連の研究が掲載されている。
- (17) 拙稿 「高陽院関白藤原頼通―頼通中心の文芸世界をめぐって―」『立教大学日本文学』第七十一号 平成九年十二月
- 補注 「猷馬」については、中込律子氏「撰関家と馬」(『王朝の権力と表象』所収 平成十年 森話社)を参照されたい。